

語彙史研究の理念と実践

《「い (行) く」と「ゆ (行) く」を例として》

佐々木 英 樹

A PRACTICAL PRINCIPLE OF LEXICAL HISTORY: a Japanese doublet meaning TO GO as an example

Hideki SASAKI

Abstract

A lexical history forms a substantial component of any language history. Methodologically, it is important first of all for philologists to accurately analyze and interpret old manuscripts. The cold fact, however, is that we no longer have access to any of the contemporary spoken language of those old manuscripts. This acts as an obvious disadvantage to studies of lexical history. It is because written language is based on its contemporary spoken language.

Facing this unrecoverable deficiency in reconstructing the history of words, how should we compensate for it? My answer to the question is that we should exhaustively compare the present written language of all kinds with its corresponding present spoken one, and later examine the differences between the two. Equipped with insight thus acquired, we would actually be able to understand old manuscripts against their 'extrapolated' contemporary spoken language.

The present writer demonstrates his proposed procedure with reference to the history of a Japanese verb doublet signifying TO GO ('iku' and 'yuku').

1. 目 的

語彙史は大きな枠組みからいえば、言語史に組み入れられるべきものである。言語史の最終的な目的は音声言語の歴史の再構である。なぜなら、あらゆる言語研究は、音声言語の歴史の再構に収束しうるからである。

言語史に組み入れられるべき語彙史の研究において、文字言語資料である文献をより精確に理解するには、同時代の音声言語資料が必要である。なぜなら、文字言語資料は、同時代の音声言語体系を前提にして存在しているからである。同時代の音声言語から決定的な影響を受けているはずの文献の特徴を

判断するのにはどうすればいいか。即ち、音声言語資料が現存しない時、文献資料がどういう点で同時代の音声言語と異なり、どういう点で同じくするものなのか、を知るにはどうすればいいか。これが私の問いである。

それに対する私の答えは、現代の音声言語とそれに対応する現代の文字言語とを徹底的に比較対照し、その「ずれ」を精査するところから出発する以外にない、ということである。このような研究を数多く、幅広く、奥深く、する以外にない。そして、それを基にして、過去の文献資料を「読み込む」、というほかない。

現代語の研究は単に現代の言語を知るだけではなく、現代の言語は、同時に、それ以前の言語の痕跡

をも引きずってきている。その痕跡の特定は簡単ではない場合が多いにしても、である。スイスの言語学者ジリエロン Jules Gilliéron は、自己の『フランス言語地図』(1902-9/1914-5)に基づく最初の論文 (Scier dans la Gaule Romane du Sud et de l'Est) を J. モンジャン Mongin と共に、1905年発表した。これは言語地理学 (= 方言地理学) の宣言書とっていいものである。そこでは、この新しい学問を une géographie ou géologie du langage (p. 3) 「言語の地理学あるいは言語の地質学」と呼んでいる。同じスイスの言語学者ドゥ・ソスュール F. De Saussure は、「共時態」と「通時態」の区別を説明するのに、植物の組織体の横断図と縦断図を利用した。これに対してジリエロンは、この新しい学問を地質学に準えた。これこそ、現代語からその歴史を推定する新しい学問であった。言語研究の宝庫である現代語の研究と文献資料による研究とは互いに手を取りあって初めて、共にその本領を発揮できるように思われる。

以上のような語彙史の構想のもとに、そのささやかな第一歩の実践例として、「行(い)く」と「行(ゆ)く」を取り上げる。

2. 「いく」と「ゆく」の使い分けについてのこれまでの見解

代表的な古語辞典にあたってみると、下記のように集約される：

- 1) 「いく」①『万葉集』7例いずれも②東歌もしくは③時代の新しい歌の中に見られ、しかも④字余り句の中に用いられている。《角川》
- 2) 「いく」①中古に入っては、②和歌では掛け詞として用いられるのが常。《角川》・《例解》
- 3) 中古の漢文訓読には、もっぱら「ゆく」が用いられ、「いく」は極めて少ない。《小学館》
- 4) ①『伊勢物語』では②多数の「いく」が「ゆく」と併存。しかし、③一般には、「ゆく」が優勢。《角川》
- 5) 「いく」は①会話文や②「もて・つつ・て」などの接続助詞に接する場合に多く用いられる。《角川》
- 6) 『源氏物語』など和文系の作品には、「いく」が相当数見られる。《小学館》
- 7) 『類聚名義抄』以下の辞書類は「ゆく」の訓のみ。《小学館》

- 8) ①「ゆく」の連用形が促音便となるときは、必ず「いつ」。しかし、②中世には、促音が脱落して③「いて・いた」の形が現れる。④「いく」は尊敬の助動詞「る」や打消の「ぬ」や「いで」などが下接する場合に多い。《角川》《日本大》《室町辞》
- 9) 『日葡辞書』は「いく」を挙げ、「ゆく」のほうがよりよいと注。《小学館》
- 10) 『天草版伊曾保物語』では「いく」が「ゆく」の半数を越す。《小学館》
- 11) 近世では、物事が進行する意からの転義(例：合点がいく)に対して「いく」が多く、「ゆく」は殆ど用いない場合も見られる。《角川》
- 12) 近世以後、口語的表現において「いく」の使用例が増大。《小学館》
- 13) 現代「ゆく」に較べると「いく」は話言葉的。従って、動詞の連用形に直接に付く「散り行く」「ふけ行く」など文章語的表現では「ゆく」。《日本大》
- 14) 「ゆく」の方がより広く使われ、特に訓点資料ではほとんどすべてが「ゆく」。《日本大》
- 15) 奈良時代以降、「いき」よりも広く使われ、特に漢文訓読体では「ゆき」。《岩波》
- 16) 「いく」①口頭語ないし②俗語的《角川》

両語の新旧の判断について注目すべきもの：
〔万葉集辞典＝折口信夫〕「ゆく」が新しい：
「いく」は「ゆく」の古形《日本大》

略称解説：

《日本大》(1980)『日本国語大辞典』小学館
《角川》中村幸彦・他(編)(1982)『角川古語大辞典』角川書店
《岩波》大野晋・他(編)(1982)『岩波古語辞典』岩波書店
《室町辞》(1985)『時代別国語大辞典・室町時代編』三省堂
《小学館》中田祝夫・他(編)(1986)『古語大辞典』小学館
《例解》小松英雄・他(編)(1992)『例解古語辞典』三省堂

統計の面からは、宮島達夫(1971)『古典対照語い表』笠間書院 に依って14の古典における両語の頻度をみておこう。

	万	竹	伊	古	土	後	蜻	枕	源	紫	更	大	方	徒	
いく	6	4	31		2		10	70	21	1	9	5			159
ゆく	381	6	32	47	24	59	42	21	185	7	16	23	2	22	867

表1

略称解説：

万＝万葉集(780) / 竹＝竹取物語(9末)
 伊＝伊勢物語(10初) / 古＝古今和歌集(905)
 土＝土佐日記(935) / 後＝後撰和歌集(951)
 蜻＝かげろう日記(974) / 枕＝枕草子(11初)
 源＝源氏物語(11前半) / 紫＝紫式部日記(1008)
 更＝更級日記(1060) / 大＝大鏡(12初)
 方＝方丈記(1212) / 徒＝徒然草(14前半)
 (成立年代は《例解》を参照した)

3. 本稿での焦点

この小論では、上の見解の中から、次の二点に絞って考察する。

- (1)現代語における両語の使われ方と文体との関係。
- (2)現代語における両語の(上記8)③の) 促音の脱落現象(「いて・いた」など)の分布。

4. 現代の文字言語と音声言語における「いく」・「ゆく」の実態

現代の文字言語(＝文献)の代表として、散文と韻文を選んだ。文献を選ぶ際には、その作品が仮名で書かれている部分が多いこと、を第一の条件にした。現代の音声言語の代表としては、NHKが録音した現代方言を活用した。

I. 文字言語資料 (1) 散文

- ①田辺聖子(1980)『私本・源氏物語』(文春文庫版)
- ②——(1984)『いっしょにお茶を』(角川文庫)

著者略歴：1928年大阪生まれ。大阪の下町育ち。
 尼崎、神戸、伊丹、等近畿圏内での移動あり、第50回芥川賞受賞。

	いく	ゆく	行く	いける	ゆける	合計
未然	38	2	6	30	2	78
連用	73(1)	16	21	11		121
終止	26	33	1	4		64
連体	22	31	4	4		61
假定	2	2				4
命令	4	1				5
連語		8	10			18
合計	165	93	42	49	2	351

表2

連用形の欄の()内の数字は、促音の脱落例の数を示す。上の場合は、文献①に「いて」が一回出てくる。ただし、会話文ではない。文献①は「いく」連用形54回のうち、会話文で使われている例は18回。文献②は19回のうち、会話文で使われている例は5回である。しかし、共に、促音の脱落例は見られない。

- ③立原とうや(1992)『シャドウ・サークル後継者の鈴』(コバルト文庫)集英社[今流行の少女向けの物語本]

著者略歴：1969年大阪府生まれ。大阪女子大卒。

	いく	ゆく	行く	いける	合計
未然	5		6	6	17
連用	6		17	1	24
終止	18		8	1	27
連体	5		13	3	21
假定			2		2
命令			1		1
連語		3	1		4
合計	34	3	48	11	96

表3

	いく	ゆく
計	199 (67.5%)	96 (32.5%)

表 4

文献③は「ゆく」を連語 (ゆくえふめい (2)/消えゆく (1)) 以外では用いていない。散文の文献①—③の合計は上記のとおり。表 4 参照。

I. 文字言語資料 (2) 韻文

①『日本の詩歌 (島崎藤村)』中央公論社、1967.

著者略歴：1872-1943. 長野県生まれ。表 5 参照。

	いく	ゆく	行く	合計
未然		3	7	10
連用		11	19	30
終止		3	16	19
連体		5	55	60
仮定		2	3	5
命令			1	1
連語		35	20	55
合計	0	59	121	180

表 5

	いく	ゆく	行く	行ける	合計
未然		3	3		6
連用		21	18		39
終止		15	22	1	38
連体		36	12		48
仮定		13	2		15
命令			1		1
連語		10	4		14
合計	0	98	62	1	161

表 6

②『日本の詩歌 (石川啄木)』中央公論社、1967.

著者略歴：1886-1912. 岩手県生まれ。表 6 参照。

③俵万智 (1987)『サラダ記念日』河出書房新社

④—— (1991)『かぜのてのひら』河出書房新社

著者略歴：1962年12月31日、大阪生まれ。詩人。

表 7 参照。

⑤谷川俊太郎 (1988)『はだか』筑摩書房〔幼児向けの平仮名だけの詩集〕

著者略歴：1931年、東京生まれ。詩人。表 8 参照。

	いく	ゆく	行く	ゆける	合計
未然		1	2	1	4
連用		3	1		4
終止		12	6		18
連体		52	3		55
仮定		1	1		2
命令	1	2			3
連語		1	1		2
合計	1	72	14	1	88

表 7

	いく	ゆく	いける	合計
未然	8			8
連用	5			5
終止	3		1	4
連体	2			2
仮定				0
命令				0
連語				0
合計	18	0	1	19

表 8

	いく	ゆく
計	99例 (7.7%)	229例 (92.3%)

表 9

表7の「いく」命令形の1例は引用文として使われているもの。韻文の文献①—⑤の合計は上記のとおり。表9参照。

4.1 I. 文献 (1) 散文・(2) 韻文の調査結果所見：

- (1) 散文は「いく」、韻文は「ゆく」の傾向であるが、韻文の「ゆく」のほうが徹底している。この点、多くの古語辞典が指摘していることが、現代語においても、当てはまる。
- (2) 散文での「ゆく」は、韻文での「いく」より、多く見られる。
- (3) 韻文資料⑤はやや特殊な例である。しかし、もしこの種の出版物が多くなれば、子供のころのこのような体験が成人してから、どのような形で言語体系の中に位置を占めるか、興味のあるところである。つまり、韻文の中で「いく」が使われ始める契機となるか、否か、興味のあるところである。
- (4) 韻文資料③・④はその内容から推測していたより、言葉の用法は意外と伝統的である。

II. 音声言語資料：

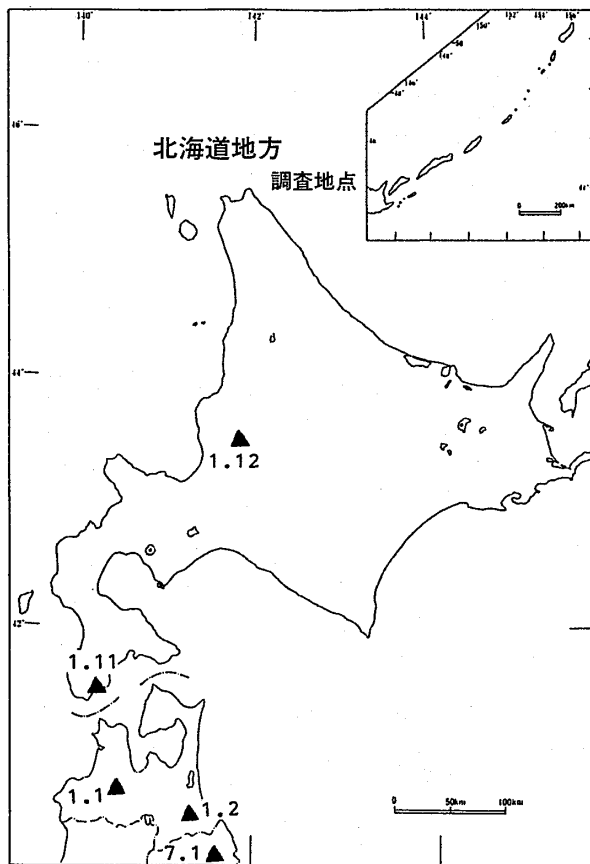
日本放送協会(編) (1966-1981)『全国方言資料』(全9巻) 日本放送出版協会
(音声を転写したものを、共通語訳したもの。旧版はソノシート付き。新版はカセットテープ付き。新版は琉球語編が2巻追加されている。ただし、琉球語は、本土の方言と著しく性質を異にしているので、この調査の対象にできなかった。)

文献資料と同じように、活用形に分類する方法を取った。厳密に言えば、活用形の所属を決めていくのには、方言ごとに分析を加えた後でなければならない。しかし、ここでは、そのような手続きがとれなかったので、問題が生じた時は、いわゆる標準語の語形と意味を参考にし、それから類推するという手段を講じた。したがって、特に、終止形と連体形の所属に問題が残ったものがいくつかあるが、大勢

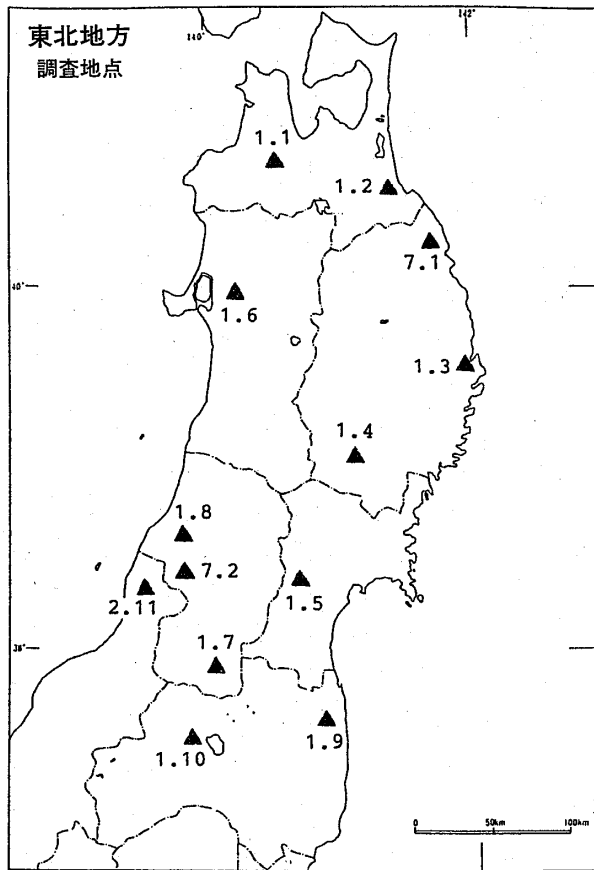
には影響がないと判断し、そのようにした。この種の作業は方言ごとに分析を加えた後でなければならない、と言ったことについては、例えば、現代諸方言における助動詞「まい」の接続について触れている、奥村三雄 (1969:240)、また、前田勇 (1977)『大阪弁』の「～はる」の接続に関する記述 (p.191)を参照。なお、ここで「方言」と私が言っているのは「特定の地理的範囲に存在する言語総体」の意味である。

琉球方言については、上で述べたように、今回の調査対象にはしなかったが、「いく・ゆく」の語形を残しているものについては、語頭の母音の差異があるかは調べた。それらはすべて「いく」系のものであり、「ゆく」系のものがない、ということは確認できた。

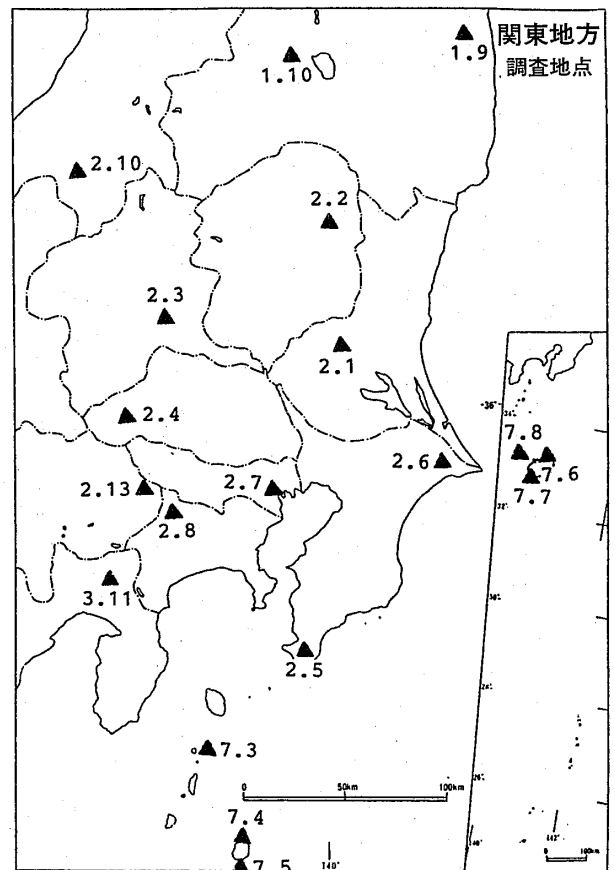
さて、調査結果の一覧表は最後に付録として挙げておいたので、それを参照していただきたい。ここでは、それを基に、目下の問題点に関する部分に限って考察する。その前に、基づいた資料の調査地点を表示しておく。地図1-7を参照。地点名は付録1を参照していただきたい。地点名は収録時点の地名、地点総数は118である。



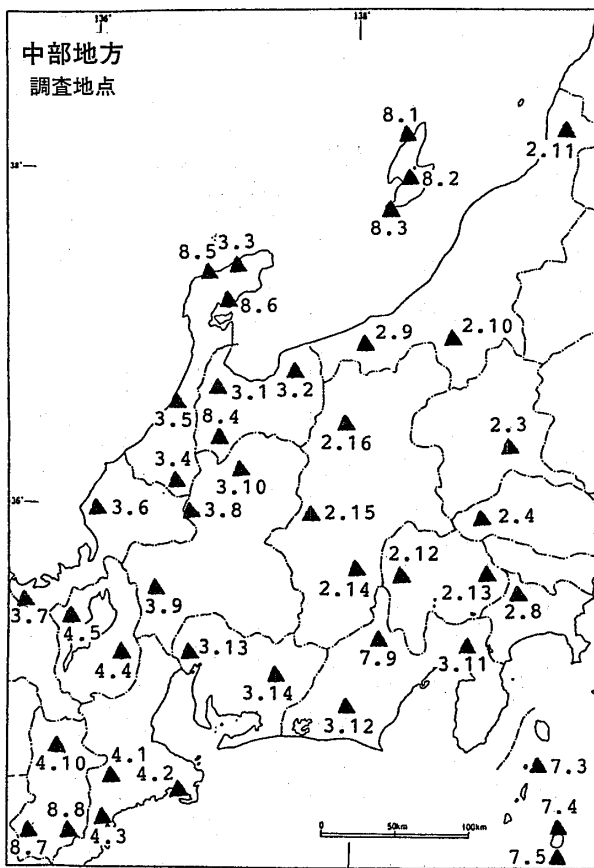
地図 1



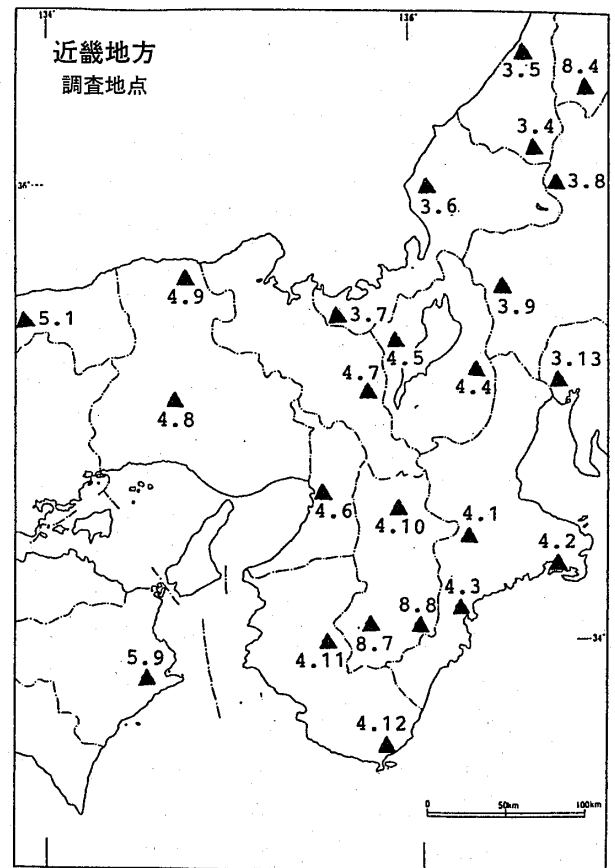
地図 2



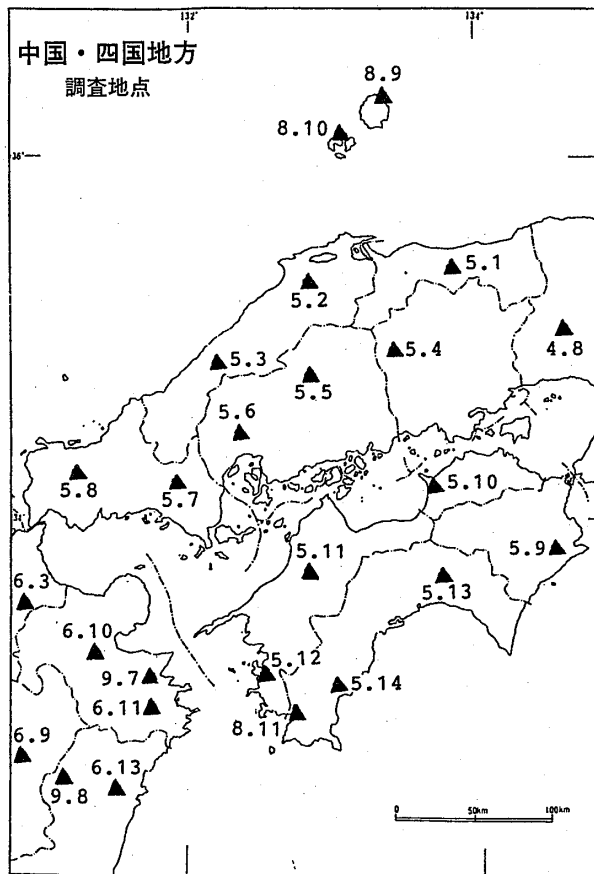
地図 3



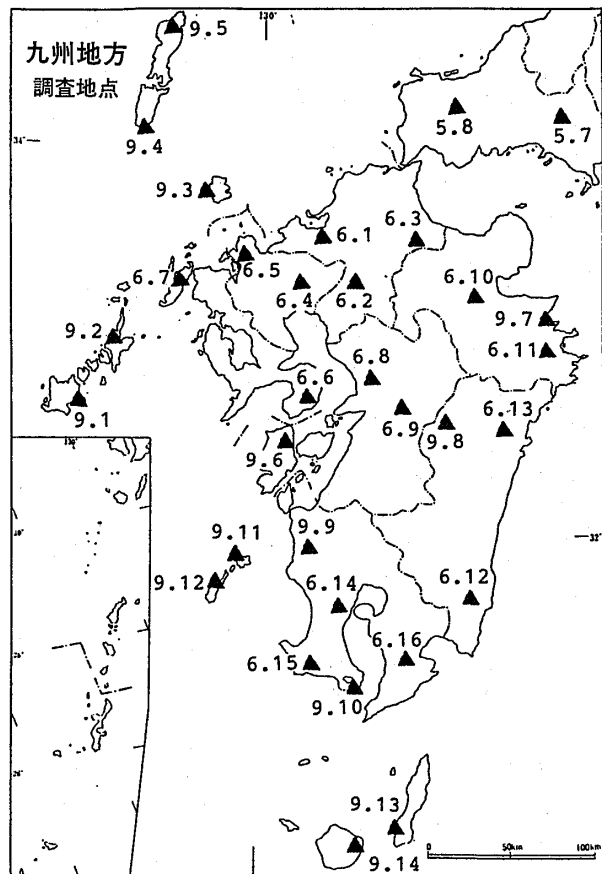
地図 4



地図 5



地図 6



地図 7

4.2 II. 音声言語資料の調査結果所見：

(1) 「いく」と「ゆく」の使用頻度と分布について

	いく	ゆく
計	2386例 (99.3%)	17例 (0.7%)

表10

表10が示すように、「ゆく」の使用頻度は、「いく」の1%にも満たない。依拠した資料は、すべて対話の形式である。口語体の典型的な形式である。結果は、先程の散文資料の結果と同じ傾向であり、韻文資料の結果と逆の傾向にある、と言える。

では、「ゆく」17地点の分布には何か意味のある分布が見られるだろうか。表11を見ても、古い「ゆく」の残存形、とても考えられる可能性が残されている、という程度のものだ。男性10、女性7という内訳をみれば、性別差も考えられない。打ち解けた会話に近づけば近づくほど「いく」が用いられる、と言うことができる。

(2) 連用形の促音の脱落現象の頻度と分布について

連用形については、そのうち「促音脱落」の例は（ ）で示してある。この現象はどういう頻度で生じ、またどういう分布を見せているだろうか。地点別だけの順位（表12）では、各地点の例数が少ないので、県別（表13）および地方別（表14）の上位を挙げておいた。これを見ると、地点別上位の14地点のうち、3地点を除いた11地点（79%）が県別上位7県に入っている。また、地点別上位の14地点のうち、1地点を除いた13地点（93%）が地方別上位3地方に入っている。こう見てみると、表12-14は、それぞれ同じ傾向を示している、と言ってもいい。

これとは反対に「促音脱落」の例が少ない地点に地理的特徴はないだろうか。この点で注意しておくべきは、関東地方（1都6県）が0.0%だということだ。地方別で0.0%は、関東地方だけである。

連用形の促音便に関わる現象に関して、日本本土を見わたすと大きく三つのブロックに気づく。

- ①四国・九州・近畿の各地方、それに秋田県を拠点とする「促音脱落」領域。
- ②関東地方を中心に隣・近接地域に幅をきかせてい

「ゆく」		内訳：地点番号（地点名）
未然	2	4.8(兵庫県神崎郡)・8.8(奈良県吉野郡)
連用	1 ()	5.6(広島県佐伯郡)
終止	10	1.6(2回)(秋田県南秋田郡)・2.16(長野県更級郡) 3.1(富山県氷見市)・3.7(福井県遠敷郡) 8.11(高知県幡多郡)・6.7(長崎県北松浦郡) 9.3(長崎県壱岐郡)・9.7(2回)(大分県臼杵郡)
連体	4	3.2(富山県下新川郡)・3.11(2回)(静岡県吉原市) 4.5(滋賀県犬上郡)

地点番号の読み方：
例えば、地点番号 4.8 は資料『第 4 巻』の目次 8 の地点

表11

地 点 別 (上位14)	
〔愛媛県〕温泉郡川内村	100 %
〔鹿児島県〕熊毛郡〔13〕	100
〔和歌山県〕東牟婁郡	94.7
〔鹿児島県〕揖宿郡	92.3
〔鹿児島県〕阿久根市	90.9
〔長崎県〕上県郡	90.0
〔長崎県〕下県郡	89.5
〔秋田県〕南秋田郡	88.9
〔鹿児島県〕熊毛郡〔14〕	87.5
〔高知県〕幡多郡大方町	85.7
〔鹿児島県〕鹿児島市	85.7
〔鹿児島県〕肝属郡	85.7
〔高知県〕幡多郡大月町	83.3
〔滋賀県〕高島郡	80.0

表12

県 別 (上位 7)		地方別 (上位 3)	
秋田県	88.9%	四国地方	75.9%
和歌山県	87.1	九州地方	56.4
高知県	81.6	近畿地方	55.3
鹿児島県	78.7		
香川県	76.5		
三重県	76.0		
愛媛県	73.0		

表13

表14

る東京発の標準語型「促音化」領域。

③出雲・伯耆を中心にした山陰地方（島根県・鳥取県）の「非促音化」領域。この分布領域が一番小さい。

統計をみると、大阪市、京都市の「促音脱落」率が意外である（それぞれ、14.3%，0.0%）（付録 2 参照）。これは、話者が改まった言葉を使用している影響の可能性が考えられる。

以上、私の語彙史の構想に従って、現代の文献資料と音声言語資料を比較検討してみた。すくなくとも、大体の方向は示すことができたのでは、と思う。文字言語と音声言語のずれは、時代によっても異なるはずである。また一口に文献資料、あるいは音声言語資料と言っても、それは多種多様である。しかし、上で示した方向でいろいろな種類の現代語を文字言語と音声言語の両面から観察し、比較することが、語彙史の方法論の重要な基礎になる、と私は考えている。

（参考文献は紙数の関係で、本文で略式に示すにとどめました）

付録1 「ゆく」の欄のない地点は該当するものがないことを示す

	1.1	1.2	1.3	1.4	7.1	1.5	1.6	1.7	1.8	7.2
	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく
未然	2	1		1	1	2	2	2	2	
連用	17 (13)	18 (3)	8 (0)	14 (1)	16 ()	16 (1)	18 (16)	13 ()	10 ()	9 ()
終止		1	1		2	3	3	2	3	5
連体	2		1	1	2	5	4		3	1
仮定					1	1	2		1	
命令							1			6
合計	21	20	10	16	22	27	30	2	21	18

付表 1.1

	1.9	1.10	1.11	1.12	合計		2.1	2.2	2.3	2.4
	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく
未然	1	8	2	1	25	未然				
連用	19 ()	25 (1)	10 (3)	4 ()	197 (38)	連用	23 ()	25 ()	6 ()	15 ()
終止	3		7	1	30	終止	2	4	1	1
連体	4		2		25	連体	8	2		1
仮定			1		6	仮定	1	1		
命令				1	8	命令				1
合計	27	33	22	7	291	合計	34	32	7	18

付表 1.2

	2.5	2.6	2.7	7.3	7.4	7.5	7.6	7.7	7.8	2.8	2.9	2.10
	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく
未然			1		2	5	6		6	1	3	
連用	12 ()	16 ()	5 ()	13 ()	17 ()	20 ()	4 ()	1 ()	11 ()	18 ()	7 ()	12 ()
終止	5	2		3	7	2	1				3	2
連体	2	2		1	7	8	1			2		
仮定				2			1					
命令	4			1	1	6	1					
合計	23	20	6	20	34	41	14	1	17	21	13	14

付表 1.3

地点番号・地名・収録日（年/月/日）

- 1.1 青森県南津軽郡黒石町 (1953/ 9/ 2)
- 1.2 青森県三戸郡五戸町 (1953/ 8/29)
- 1.3 岩手県宮古市高浜 (1953/ 7/14)
- 1.4 岩手県胆沢郡佐倉河村 (1953/ 9/10)
- 7.1 岩手県九戸郡市町中野 (1962/ 8/ 6)
- 1.5 宮城県宮城郡白石村 (1953/ 7/19)
- 1.6 秋田県南秋田郡富津内村 (1953/ 8/19)
- 1.7 山形県南置賜郡三沢村 (1953/ 8/ 2)
- 1.8 山形県東田川郡黒川村 (1953/ 8/14)
- 7.2 山形県東田川郡朝日村大鳥 (1962/ 8/13)

地点番号・地名・収録日（年/月/日）

- 1.9 福島県相馬郡石神村 (1953/ 9/15)
- 1.10 福島県河沼郡勝常村 (1953/ 8/ 6)
- 1.11 北海道松前郡福島町白符 (1958/ 8/19)
- 1.12 北海道美唄市西美唄山形 (1958/ 8/23)
- 2.1 茨城県新治郡葦穂村 (1952/ 9/19)
- 2.2 栃木県那須郡黒羽町 (1952/ 9/15)
- 2.3 群馬県勢多郡大胡町 (1952/ 8/23)
- 2.4 埼玉県秩父郡両神村 (1952/ 8/27)

地点番号・地名・収録日（年/月/日）

- 2.5 千葉県安房郡富崎村布良 (1953/ 2/22)
- 2.6 千葉県香取郡小見川町神里 (1953/ 2/ 1)
- 2.7 東京都（江戸） (1952/ 8/ 9)
- 7.3 東京都利島村 (1962/ 6/21)
- 7.4 東京都三宅村神着 (1959/ 2/24)
- 7.5 東京都三宅村坪田 (1959/ 2/19)
- 7.6 東京都八丈町大賀郷 (1959/ 3/ 9)
- 7.7 東京都八丈町中之郷 (1959/ 3/ 4)
- 7.8 東京都八丈町宇津木 (1962/ 6/ 2)
- 2.8 神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村
(1953/ 3/22) (1962/11/16)
- 2.9 新潟県糸魚川市砂場 (1958/ 9/18)
- 2.10 新潟県中魚沼郡津南町結束 (1957/ 9/ 2)

	2.11	8.1	8.2	8.3	2.12	2.13	2.14	2.15	2.16	合計	
	い<	い<	い<	い<	い<	い<	い<	い<	い< ㇿ<	い<	ㇿ<
未然	1	2	3	1	3		1	1	3	39	
連用	17 (1)	26 ()	12 (1)	14 ()	15 ()	5 ()	16 ()	32 (1)	21 (1)	363 (4)	()
終止	3	2	3	2	1		1	2	1	48	1
連体	1	1			3		3	1	5	48	
仮定							1	1		7	
命令		1			1			3	1	20	
合計	22	32	18	17	23	5	22	40	31	525	1

付表 1.4

	3.1		3.2		8.4	3.3	3.4	3.5	8.5	8.6
	い<	ㇿ<	い<	ㇿ<	い<	い<	い<	い<	い<	い<
未然	1		3		4	6	3	7	1	6
連用	16 (2)	()	11 ()	()	27 ()	13 ()	20 (2)	17 ()	21 (1)	19 (2)
終止	4	1	2		3		3	4	4	4
連体				1	3	1	1	2		
仮定	1					1			2	
命令			1					2	2	
合計	22	1	17	1	37	21	27	32	30	29

付表 1.5

	3.6	3.7		3.8	3.9	3.10	3.11		3.12	7.9	3.13	3.14
	い<	い<	ㇿ<	い<	い<	い<	い<	ㇿ<	い<	い<	い<	い<
未然		5		2	1		2			1	4	3
連用	11 (1)	12 ()	()	16 (2)	12 ()	11 ()	28 ()	()	11 ()	7 ()	16 (2)	12 ()
終止	2	1	1	2	2	1				2	1	1
連体		1			7	2	4	2	1		5	5
仮定					2		1					
命令							2					
合計	13	19	1	20	24	14	37	2	12	10	26	21

付表 1.6

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

- 2.11 新潟県岩船郡朝日村高根 (1957/ 7/31)
 8.1 新潟県佐渡郡相川町大倉 (1958/ 7/27)
 8.2 新潟県佐渡郡畑野村後山 (1958/ 7/30)
 8.3 新潟県佐渡郡羽茂村大崎 (1958/ 7/23)
 2.12 山梨県南巨摩郡早川町奈良田
 (1957/ 8/27)
 2.13 山梨県北都留郡上野原町西原
 (1958/ 9/22)
 2.14 長野県上伊那郡高遠町山室 (旧・三義村)
 (1958/ 8/ 5)
 2.15 長野県西筑摩郡新開村黒川西洞
 (1957/ 7/14)
 2.16 長野県更級郡大岡村芦の尻 (1957/ 8/ 4)

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

- 3.1 富山県氷見市飯久保 (1956/ 8/ 3)
 3.2 富山県下新川郡入善町小摺戸
 (1956/ 9/ 6)
 8.4 富山県東砺波郡平村上梨 (1960/ 7/18)
 3.3 石川県輪島市名舟町 (1956/ 7/24)
 3.4 石川県石川郡白峰村白峰 (1956/ 8/18)
 3.5 石川県河北郡内灘村大根布 (1956/ 9/ 1)
 8.5 石川県輪島市海士町 (1962/ 9/21)
 8.6 石川県鹿島郡能登島町向田 (1960/ 8/ 8)

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

- 3.6 福井県丹生郡織田町笈松 (1956/ 7/19)
 3.7 福井県遠敷郡名田庄村納田終
 (1956/ 9/18)
 3.8 岐阜県郡上郡白鳥町石徹白 (1956/ 8/ 8)
 3.9 岐阜県揖斐郡久瀬村西津汲 (1956/ 9/23)
 3.10 岐阜県古城郡古川町黒内 (1956/ 8/23)
 3.11 静岡県吉原市吉永 (1958/ 2/18)
 3.12 静岡県掛川市上西之谷 (1958/ 2/ 3)
 7.9 静岡県阿倍郡井川村田代 (1962/ 8/29)
 3.13 愛知県海部郡立田村小家 (1958/ 9/ 2)
 3.14 愛知県南設楽郡作手村菅沼 (1957/ 7/18)

	合計			4.1	4.2	4.3	4.4	4.5		4.6	4.7
	いく	ゆく		いく	いく	いく	いく	いく	ゆく	いく	いく
未然	49		未然		2	4	2	3		1	3
連用	280 (12)	()	連用	9 (7)	8 (6)	8 (6)	8 (1)	10 (8)	()	7 (1)	10 ()
終止	36	2	終止	1	4	2	3	3			
連体	32	3	連体	1	3		5	2	1		1
仮定	7		仮定			2		1			
命令	7		命令			1					
合計	411	5	合計	11	17	17	18	19	1	8	14

付表 1.7

	4.8		4.9	4.10	8.7	8.8		4.11	4.12	合計	
	いく	ゆく	いく	いく	いく	いく	ゆく	いく	いく	いく	ゆく
未然		1	2		2	3	1	2	1	25	2
連用	14 (6)	()	9 (1)	10 (2)	18 (14)	8 (4)	()	12 (9)	19 (18)	150 (83)	()
終止	1				2	1			1	18	
連体			1	1		3			2	19	1
仮定					1					4	
命令			2							3	
合計	15	1	14	11	23	15	1	14	23	219	3

付表 1.8

	5.1	5.2	5.3	8.9	8.10	5.4	5.5	5.6		5.7	5.8	5.9
	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	ゆく	いく	いく	いく
未然	1		2	2	3	2	1	1		3	4	1
連用	11 ()	3 ()	12 ()	5 ()	13 ()	11 (2)	9 ()	14 ()	1 ()	12 ()	7 (1)	19 (11)
終止		1								1	1	2
連体			1	3		1				1		1
仮定			1				1					
命令								1				
合計	12	4	16	10	16	14	11	16	1	17	12	23

付表 1.9

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

- 4.1 三重県一志郡美杉村川上 (1957/ 9/10)
- 4.2 三重県志摩郡浜島町南張 (1958/ 2/ 8)
- 4.3 三重県北牟婁郡海山町河内 (1958/ 8/11)
- 4.4 滋賀県犬上郡多賀町萱原 (1957/ 8/18)
- 4.5 滋賀県高島郡朽木村 (1958/ 7/ 3)
- 4.6 大阪府大阪市 (1953/11/22)
- 4.7 京都府京都市 (1953/11/26)

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

- 4.8 兵庫県神崎郡神崎町栗賀 (1958/ 9/ 7)
- 4.9 兵庫県城崎郡城崎町飯谷 (1958/ 7/ 8)
- 4.10 奈良県山辺郡都祁村 (旧・都介野村)
(1957/ 9/14)
- 8.7 奈良県吉野郡十津川村小原 (1960/ 8/ 3)
- 8.8 奈良県吉野郡下北山村上桑原
(1960/ 7/13)
- 4.11 和歌山県日高郡竜神村大熊 (1957/ 8/23)
- 4.12 和歌山県東牟婁郡古座町 (1958/ 2/23)

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

- 5.1 鳥取県倉吉市国分寺 (1955/ 8/ 4)
- 5.2 島根県大原郡大東町春殖畑嶋 (1955/8/9)
- 5.3 島根県那賀郡雲城村 (1955/ 9/ 9)
- 8.9 島根県周吉郡中村伊後 (1959/ 6/15)
- 8.10 島根県知夫郡西ノ島町黒木字賀
(1959/ 6/20)
- 5.4 岡山県真庭郡勝山町神代 (1955/ 8/20)
- 5.5 広島県庄原市山内町 (旧・比婆郡山内西村)
(1955/ 8/25)
- 5.6 広島県佐伯郡水内村 (1955/ 7/20)
- 5.7 山口県都濃郡都濃町 (旧・須金村)
(1955/ 7/25)
- 5.8 山口県美禰郡秋芳町別府江原
(1955/ 9/ 4)
- 5.9 徳島県那賀郡延野村雄 (1956/ 2/ 6)

	5.10	5.11	5.12	5.13	5.14	8.11		合計			6.1
	い<	い<	い<	い<	い<	い<	ゆ<	い<	ゆ<		い<
未然	10	3	5		10	1		49		未然	2
連用	17 (13)	8 (8)	15 (9)	23 (18)	14 (12)	12 (10)	()	205 (84)	1 ()	連用	15 (3)
終止	3	1	4	7	2		1	22	1	終止	1
連体	4	3	2	1	3	1		21		連体	
仮定	1					1		4		仮定	
命令	1			1				3		命令	
合計	36	15	26	32	29	15	1	304	2	合計	18

付表 1.10

	6.2	6.3	6.4	6.5	6.6	6.7		9.1	9.2	9.3		9.4
	い<	い<	い<	い<	い<	い<	ゆ<	い<	い<	い<	ゆ<	い<
未然	5	2	6	6	6	1		11	2	2		11
連用	15 (9)	7 (5)	8 (2)	19 (15)	11 (6)	18 (5)	()	16 (3)	5 (2)	12 ()	()	19 (17)
終止	2			4	2	2	1	2	1	2	1	4
連体	1		1	1	1	2			2	1		
仮定		1	1						1			
命令								3				
合計	23	10	16	30	20	23	1	32	11	17	1	34

付表 1.11

	9.5	6.8	6.9	9.6	6.10	6.11	9.7		6.12	6.13	9.8	6.14
	い<	い<	い<	い<	い<	い<	い<	ゆ<	い<	い<	い<	い<
未然	3	5	3	4	3	2	1		2	1	3	3
連用	10 (9)	13 ()	4 (3)	11 (7)	12 (6)	16 (9)	20 (14)	()	21 (7)	9 (5)	12 (3)	7 (6)
終止	1	1	3			2	5	2	3	1	3	
連体		1	3	1	1	3	1			2	5	
仮定				1		1						
命令		1		2	1		1					
合計	14	21	13	19	17	24	28	2	26	13	23	10

付表 1.12

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

5.10 香川県三豊郡詫間町大浜肥地木

(1956/ 2/ 1)

5.11 愛媛県温泉郡川内村井内 (1956/ 1/17)

5.12 愛媛県北宇和郡津島町 (1956/ 2/21)

5.13 高知県香美郡美良布町 (1956/ 1/22)

5.14 高知県幡多郡大方町 (1956/ 2/16)

8.11 高知県幡多郡大月町竜ヶ迫 (1962/ 9/ 5)

6.1 福岡県福岡市博多 (1954/ 8/13)

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

6.2 福岡県三井郡善導寺町 (1954/ 9/19)

6.3 福岡県築上郡岩屋村鳥井畑 (1954/ 7/17)

6.4 佐賀県佐賀郡久保泉村川久保

(1954/ 9/24)

6.5 佐賀県東松浦郡有浦村 (1954/ 8/31)

6.6 長崎県南高来郡有家町 (1954/ 8/18)

6.7 長崎県北松浦郡中野村 (1954/ 9/ 5)

9.1 長崎県福江市上大津 (1959/ 7/30)

9.2 長崎県南松浦郡新魚目町浦桑

(1959/ 8/ 4)

9.3 長崎県壱岐郡郷ノ浦町里触 (1959/ 7/ 4)

9.4 長崎県下県郡厳原町豆酸 (1959/ 7/10)

地点番号・地名・収録日 (年/月/日)

9.5 長崎県上県郡上対馬町鰐浦 (1959/ 7/18)

6.8 熊本県熊本市中唐人町 (1954/ 7/26)

6.9 熊本県上益城郡浜町 (1954/ 8/23)

9.6 熊本県本渡市佐伊津 (1961/ 7/ 4)

6.10 大分県大分郡西庄内村 (1954/ 7/22)

6.11 大分県南海部郡上野村 (1954/ 8/ 4)

9.7 大分県臼杵市諏訪津留 (1961/ 7/24)

6.12 宮崎県日南市飫肥町 (1954/ 9/10)

6.13 宮崎県東臼杵郡南方村 (1954/ 8/ 9)

9.8 宮崎県西臼杵郡五箇瀬町桑野内

(1961/ 7/26)

6.14 鹿児島県鹿児島市 (1954/ 8/27)

	6.15	6.16	9.9	9.10	9.11	9.12	9.13	9.14	合計	
	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	いく	ゆく
未然	2	2		16	4	6	6	12	132	
連用	7 (6)	31 (23)	11 (10)	13 (12)	15 (8)	8 (5)	8 (8)	8 (7)	381 (215)	()
終止			2	2			5	3	51	4
連体	1		9	2	2	2	4	2	48	
仮定					1		1	3	10	
命令			2		2		2		14	
合計	10	33	24	33	24	16	26	28	636	4

付表 1.13

	総合計	
	いく	ゆく
未然	319	2
連用	1576 (436)	1 ()
終止	205	10
連体	193	4
仮定	38	
命令	55	
合計	2386	17

付表 1.14

地点番号・地名・収録日（年/月/日）

6.15 鹿児島県枕崎市鹿籠（1954/ 7/31）

6.16 鹿児島県肝属郡高山町麓（1954/ 9/16）

9.9 鹿児島県阿久根市大川尻無小麦

（1961/ 7/10）

9.10 鹿児島県揖宿郡山川町岡児ヶ水

（1961/ 8/ 2）

9.11 鹿児島県薩摩郡上甕村中甕（1962/ 7/14）

9.12 鹿児島県薩摩郡鹿島村鹿島（1962/ 7/19）

9.13 鹿児島県熊毛郡南種子町島間小平山

（1959/ 5/18）

9.14 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦

（1959/ 5/25）

付録2 促音脱落現象（実現率の高い順）

地方別順位（10）

四国地方 （高知・香川・愛媛・徳島県） 81/108=75.0%
九州地方（鹿児島・佐賀・大分・ 長崎・福岡・熊本・宮崎県） 215/381=56.4%
近畿地方（和歌山・三重・奈良・ 滋賀・兵庫県/大阪・京都市） 83/150=55.3%
北海道地方 3/14=21.4%
東北地方（秋田・青森・宮城・岩 手・福島・山形県） 35/183=19.1%
北陸地方（石川・福井・富山県） 8/167=16.7%
東海地方（愛知・岐阜・静岡県） 4/113=3.5%
中国地方（岡山・山口・広島・島 根・鳥取県） 3/97=3.1%
甲信越地方（長野・新潟・山梨県） 4/177=2.3%
関東地方（東京都/千葉・栃木・茨 城・神奈川・埼玉・群馬県） 0/186=0.0%

県別順位（46）

秋田県 88.9% (16/18)	福島県 2.3% (1/44)
和歌山県 87.1 (27/31)	
高知県 81.6 (40/49)	東京都 0.0% (0/71)
	静岡県 0.0 (0/46)
鹿児島県 78.7% (85/108)	島根県 0.0 (0/33)
香川県 76.5 (13/17)	山形県 0.0 (0/32)
三重県 76.0 (19/25)	千葉県 0.0 (0/28)
愛媛県 73.9 (17/23)	栃木県 0.0 (0/25)
	広島県 0.0 (0/23)
佐賀県 63.0% (17/27)	茨城県 0.0 (0/23)
大分県 60.4 (29/48)	山梨県 0.0 (0/20)
	神奈川県 0.0 (0/18)
徳島県 57.9% (11/19)	埼玉県 0.0 (0/15)
奈良県 55.6 (20/36)	鳥取県 0.0 (0/11)
滋賀県 50.0 (9/18)	京都市 0.0 (0/10)
	群馬県 0.0 (0/ 6)
長崎県 46.2% (42/91)	
福岡県 45.9 (17/37)	
青森県 45.7 (16/35)	
宮崎県 35.7% (15/42)	
熊本県 35.7 (10/28)	
兵庫県 30.4 (7/23)	
北海道 21.4% (3/14)	
岡山県 18.2% (2/11)	
大阪市 14.3 (1/ 7)	
愛知県 7.1% (2/28)	
宮城県 6.3% (1/16)	
石川県 5.6% (5/90)	
山口県 5.3 (1/19)	
岐阜県 5.1 (2/39)	
福井県 4.3% (1/23)	
富山県 3.7% (2/54)	
長野県 2.9% (2/69)	
岩手県 2.6 (1/38)	
新潟県 2.3 (2/88)	

表の読み方：

分数字、例えば、81/108は、統計で、連用形の属する例が108回あり、そのうち81回が「促音脱落」の例であったことを意味する。

地点別順位 (118)

5.11 100.0%(8/ 8)〔愛媛県〕	4. 8 42.9%(6/14)〔兵庫県〕	3. 5 0.0%(0/17)〔石川県〕
9.13 100.0 (8/ 8)〔鹿児島県〕	9. 2 40.0 (2/ 5)〔長崎県〕	7. 4 0.0 (0/17)〔東京都〕
4.12 94.7%(18/19)〔和歌山県〕	6.12 33.3%(7/21)〔宮崎県〕	2. 6 0.0 (0/16)〔千葉県〕
9.10 92.3 (12/13)〔鹿児島県〕	1.11 30.0 (3/10)〔北海道〕	2.14 0.0 (0/16)〔長野県〕
9. 9 90.9 (10/11)〔鹿児島県〕	6. 7 27.8%(5/18)〔長崎県〕	7. 1 0.0 (0/16)〔岩手県〕
9. 5 90.0 (9/10)〔長崎県〕	9. 8 25.0 (3/12)〔宮崎県〕	2. 4 0.0 (0/15)〔埼玉県〕
9. 4 89.5%(17/19)〔長崎県〕	6. 4 25.0 (2/ 8)〔佐賀県〕	2.12 0.0 (0/15)〔山梨県〕
1. 6 88.9 (16/18)〔秋田県〕	6. 1 20.0 (3/15)〔福岡県〕	5. 6 0.0 (0/15)〔広島県〕
9.14 87.5 (7/ 8)〔鹿児島県〕	4.10 20.0 (2/10)〔奈良県〕	8. 3 0.0 (0/14)〔新潟県〕
5.14 85.7 (12/14)〔高知県〕	9. 1 18.8%(3/16)〔長崎県〕	1. 7 0.0 (0/13)〔山形県〕
6.14 85.7 (6/ 7)〔鹿児島県〕	5. 4 18.2 (2/11)〔岡山県〕	3. 3 0.0 (0/13)〔石川県〕
6.15 85.7 (6/ 7)〔鹿児島県〕	1. 2 16.7 (3/18)〔青森県〕	6. 8 0.0 (0/13)〔熊本県〕
8.11 83.3 (10/12)〔高知県〕	4. 6 14.3 (1/ 7)〔大阪市〕	7. 3 0.0 (0/13)〔東京都〕
4. 5 80.0 (8/10)〔滋賀県〕	5. 8 14.3 (1/ 7)〔山口県〕	8.10 0.0 (0/13)〔島根県〕
6. 5 78.9%(15/19)〔佐賀県〕	3. 1 12.5 (2/16)〔富山県〕	2. 5 0.0 (0/12)〔千葉県〕
5.13 78.3 (18/23)〔高知県〕	3. 8 12.5 (2/16)〔岐阜県〕	2.10 0.0 (0/12)〔新潟県〕
8. 7 77.8 (14/18)〔奈良県〕	3.13 12.5 (2/16)〔愛知県〕	3. 7 0.0 (0/12)〔福井県〕
4. 1 77.8 (7/ 9)〔三重県〕	4. 4 12.5 (1/ 8)〔滋賀県〕	3. 9 0.0 (0/12)〔岐阜県〕
1. 1 76.5 (13/17)〔青森県〕	4. 9 11.1 (1/ 9)〔兵庫県〕	3.14 0.0 (0/12)〔愛知県〕
5.10 76.5 (13/17)〔香川県〕	8. 6 10.5 (2/19)〔石川県〕	5. 3 0.0 (0/12)〔島根県〕
4.11 75.0 (9/12)〔和歌山県〕	3. 4 10.0 (2/20)〔石川県〕	5. 7 0.0 (0/12)〔山口県〕
4. 2 75.0 (6/ 8)〔三重県〕	3. 6 9.1%(1/11)〔福井県〕	9. 3 0.0 (0/12)〔長崎県〕
4. 3 75.0 (6/ 8)〔三重県〕	8. 2 8.3 (1/12)〔新潟県〕	3. 2 0.0 (0/11)〔富山県〕
6. 9 75.0 (3/ 4)〔熊本県〕	1. 4 7.1 (1/14)〔岩手県〕	3.10 0.0 (0/11)〔岐阜県〕
6.16 74.2 (23/31)〔鹿児島県〕	1. 5 6.3 (1/16)〔宮城県〕	3.12 0.0 (0/11)〔静岡県〕
6. 3 71.4 (5/ 7)〔福岡県〕	2.11 5.9 (1/17)〔新潟県〕	5. 1 0.0 (0/11)〔鳥取県〕
9. 7 70.0 (14/20)〔大分県〕	2.16 4.8 (1/21)〔長野県〕	7. 8 0.0 (0/11)〔東京都〕
9. 6 63.6%(7/11)〔熊本県〕	8. 5 4.8 (1/21)〔石川県〕	1. 8 0.0 (0/10)〔山形県〕
9.12 62.5 (5/ 8)〔鹿児島県〕	1.10 4.0 (1/25)〔福島県〕	4. 7 0.0 (0/11)〔京都市〕
5.12 60.0 (9/15)〔愛媛県〕	2.15 3.1 (1/32)〔長野県〕	5. 5 0.0 (0/ 9)〔広島県〕
6. 2 60.0 (9/15)〔福岡県〕	3.11 0.0%(0/28)〔静岡県〕	7. 2 0.0 (0/ 9)〔山形県〕
5. 9 57.9%(11/19)〔徳島県〕	8. 4 0.0 (0/27)〔富山県〕	1. 3 0.0 (0/ 8)〔岩手県〕
6.11 56.3 (9/16)〔大分県〕	8. 1 0.0 (0/26)〔新潟県〕	2. 9 0.0 (0/ 7)〔新潟県〕
6.13 55.6 (5/ 9)〔宮崎県〕	2. 2 0.0 (0/25)〔栃木県〕	7. 9 0.0 (0/ 7)〔静岡県〕
6. 6 54.5 (6/11)〔長崎県〕	2. 1 0.0 (0/23)〔茨城県〕	2. 3 0.0 (0/ 6)〔群馬県〕
9.11 53.3 (8/15)〔鹿児島県〕	7. 5 0.0 (0/20)〔東京都〕	2. 7 0.0 (0/ 5)〔東京都〕
6.10 50.0 (6/12)〔大分県〕	1. 9 0.0 (0/19)〔福島県〕	2.13 0.0 (0/ 5)〔山梨県〕
8. 8 50.0 (4/ 8)〔奈良県〕	2. 8 0.0 (0/18)〔神奈川県〕	8. 9 0.0 (0/ 5)〔島根県〕
		1.12 0.0 (0/ 4)〔北海道〕
		7. 6 0.0 (0/ 4)〔東京都〕
		5. 2 0.0 (0/ 3)〔島根県〕
		7. 7 0.0 (0/ 1)〔東京都〕